

頭部外傷後遷延性意識障害患者の関節可動域制限の調査

○本多 和成¹、平田 里恵¹、松本 未来¹、小寺 剛志¹、中村 龍²
萬代 眞哉³、衣笠 和孜³

¹自動車事故対策機構 岡山療護センター 診療部 リハビリテーション科

²自動車事故対策機構 岡山療護センター 診療部 麻酔科

³自動車事故対策機構 岡山療護センター 診療部 脳神経外科

【目的】遷延性意識障害患者は関節可動域制限の発生頻度が極めて高い。関節可動域制限は姿勢、日常生活動作、介護負担、介護用住宅の環境設定や福祉機器の選定に影響し、その改善には難渋することが多い。

今回、交通事故による頭部外傷後遷延性意識障害患者の関節可動域制限の部位と程度の実態を把握するために後方視的に調査した。

【方法】対象は平成23年4月～平成26年3月に当センターに入院した遷延性意識障害患者46名で、入院後に測定した初回他動的関節可動域の実測値とそれが参考可動範囲に占める割合を%換算した値（以下ROM比）を、関節部位や運動方向、患者の属性などと比較分析した。

【結果】46名から実測値が得られた関節運動方向総数（体幹・手足指を除く）は2134方向で、そのうち1399方向に制限を認め、測定した関節運動方向総数の66%を占めた。

関節運動方向別でROM比の平均値を比較した場合、足関節背屈が-97%で最も小さく、他には股関節伸展、肩関節外旋、足関節外反、肩関節外転、頸部側屈が小さかった。

関節別でROM比の平均値を比較した場合、足関節が29%で最も小さく、他には頸部、肩関節が小さかった。

全身ROM比の平均値を受傷後経過日数別で比較した場合、90～119日の群が66%、120～179日の群が69%、180日以上群が69%であった。

【結語】交通事故による頭部外傷後遷延性意識障害患者においては関節可動域制限が多発し、四肢のみならず頸部にも認められることがわかった。さらに意識障害が遷延する以前から関節可動域制限を来し、その後も残存していることがわかった。

これらから意識障害が遷延する恐れがある場合は全身の関節可動域制限の早期予防が必要だと考える。